

### §3 会 議



# 1 臨時ローマ字調査会

(昭5.11.25～昭11.6.30)

○官制 (昭5.11.25)

勅令第222号

(原文は縦書)

## 臨時ローマ字調査会官制

第1条 臨時ローマ字調査会ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ国語ノローマ字綴方ニ関スル事項ヲ調査ス

第2条 調査会ハ会長1人及委員35人以内ヲ以テ之ヲ組織ス  
前項定員ノ外必要アル場合ニ於テハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第3条 会長ハ文部大臣ヲ以テ之ニ充ツ

委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第4条 会長ハ会務ヲ総理ス

会長事故アル時ハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第5条 会長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第6条 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ調査会ノ請求アルトキハ適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第7条 調査会ノ議事ニ関スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第8条 調査会ニ幹事長1人及幹事若干人ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事長ハ会長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ掌理ス

幹事ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第9条 調査会ニ書記若干人ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○官制廃止（昭 11. 6. 30）

勅令第 144 号

（原文は従書）

臨時ローマ字調査会官制ハ之ヲ廃止ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○議事規則（文部省令 昭 5. 12. 16）

臨時ローマ字調査会議事規則（原文は縦書）

第 1 条 会議ハ会長之ヲ招集ス

第 2 条 会長ハ会議ノ議長ト為リ議事ヲ整理ス

第 3 条 会議ハ会長、委員及臨時委員ヲ合セ其半数以上出席スルニ  
アラサレハ之ヲ開クコトヲ得ス

第 4 条 議席ハ予メ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第 5 条 会議ハ公開セス

第 6 条 発言セントスル者ハ議長ノ許可ヲ受クヘシ

第 7 条 議事ハ出席ノ委員及臨時委員ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス  
会長可否ノ數ニ加ハリタルトキハ之ヲ出席委員ト看做ス  
可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス

第 8 条 会長必要ト認ムルトキハ委員及臨時委員ノ中ヨリ主査委員  
ヲ選定シ審査ヲ為サシムルコトヲ得  
主査委員ハ其互選ニ依リ委員長ヲ置ク  
主査委員長ハ審査ノ経過及結果ヲ會議ニ報告スヘシ  
主査委員会ニハ本則ノ規定ヲ準用ス

○會議の開会

・総 会

第1回(昭5.12.15)～第14回(昭11.6.26)

・主査委員会

第1次主査委員会

第1回(昭9.3.6)～第12回(昭9.7.14)

第2次主査委員会

第1回(昭10.5.10)～第10回(昭10.7.23)

第3次主査委員会

第1回(昭11.1.17)～第3回(昭11.1.31)

臨時ロ一マ字調査会委員名簿(昭5.11.26現在)

委 員

鈴木富士彌	内閣書記官長	藤岡 勝二	東京帝国大学 教授
川崎 卓吉	法制局長官	長屋 順耳	東京外国語学 校長
吉田 茂	外務次官	岡田 武松	気象台技師
潮 恵之輔	内務次官	松村真一郎	農林次官
河田 烈	大蔵次官	田島勝太郎	商工次官
杉山 元	陸軍次官	今井田清徳	逓信次官
石井 英橘	陸軍少将	青木 周三	鉄道次官
小林 躋造	海軍次官	久保田敬一	鉄道省運輸局長
米村 末喜	海軍中将	侯爵 小村 欣一	拓務次官
小原 直	司法次官	桜井 錠二	正三位勳一等
野村 嘉六	文部政務次官	鎌田 栄吉	従三位勳一等
中川 健蔵	文部次官	男爵 阪谷 芳郎	正三位勳一等
大麻 唯男	文部参与官	田中館愛橘	正三位勳一等
篠原英太郎	文部省普通学務局長	嘉納治五郎	〃
芝田 徹心	文部省図書局長	上田 万年	〃

田丸 卓郎 従三位勳二等 中目 覺 正四位勳三等  
 伯爵 林 博太郎 正三位勳二等 福永 恭助 正六位勳四等功五級

幹事長

芝田 徹心 文部省図書局長

幹事

森山 鋭一 法制局参事官 山崎 厚二 文部省図書事務官

菊沢 季麿 文部書記官 保科 孝一 東京文理科大学教授

臨時ローマ字調査会在任（職）年月日

（年号はすべて昭和である。）

会 長

5.11.26 ~ 6.12.13	田 中 隆 三	文部大臣
6.12.13 ~ 9. 3. 3	鳩 山 一 郎	〃
9. 3. 3 ~ 9. 7. 8	子爵 斎 藤 実	〃
9. 7. 8 ~ 11. 2. 1	松 田 源 治	〃
11. 2. 2 ~ 11. 3. 9	川 崎 卓 吉	〃
11. 3. 9 ~ 11. 3.25	潮 恵 之 助	〃
11. 3.25 ~ 11. 6.30	平 生 鈇三郎	〃

委 員

5.11.26 ~ 6. 4.14	鈴 木 富士彌	内閣書記官長
6. 5. 5 ~ 6.12.13	川 崎 卓 吉	〃
7. 2.10 ~ 7. 5.26	森 恪	〃
7. 6.18 ~ 8. 3.13	柴 田 善三郎	〃
8. 5. 6 ~ 9. 7. 8	堀 切 善次郎	〃
9. 7.31 ~ 9.10.20	河 田 烈	〃
9.11.10 ~ 10. 5.11	吉 田 茂	〃
10. 6.11 ~ 11. 3.10	白 根 竹 介	〃

11. 4.30 ~ 11. 6.30	藤 沼 庄 平	内閣書記官長
5.11.26 ~ 6. 4.14	川 崎 卓 吉	法制局長官
6. 5. 5 ~ 6.11. 9	武 内 作 平	〃
6.11.25 ~ 6.12.13	斉 藤 隆 夫	〃
7. 2.10 ~ 7. 5.26	島 田 俊 雄	〃
7. 6.18 ~ 8. 3.13	堀 切 善次郎	〃
8. 5. 6 ~ 9. 7. 8	黒 崎 定 三	〃
9. 7.31 ~ 11. 1.11	金 森 徳次郎	〃
11. 1.16 ~ 11. 3.10	大 橋 八 郎	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	次 田 大三郎	〃
5.11.26 ~ 5.12. 6	吉 田 茂	外務次官
5.12.15 ~ 7. 5.10	永 井 松 三	〃
7. 6.18 ~ 8. 5.16	有 田 八 郎	〃
8. 7.10 ~ 11. 4.10	重 光 葵	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	堀 内 謙 介	〃
5.11.26 ~ 6. 8. 8	潮 恵之輔	内務次官
6. 9.12 ~ 6.12.14	次 田 大三郎	〃
7. 2.10 ~ 7. 5.27	河原田 稼 吉	〃
7. 6.18 ~ 9. 7.10	潮 恵之輔	〃
9. 7.31 ~ 10. 6.28	丹 羽 七 郎	〃
10. 7.12 ~ 11. 3.13	赤 木 朝 治	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	湯 沢 三千男	〃
5.11.26 ~ 6.12.14	河 田 烈	大蔵次官
7. 2.10 ~ 9. 5.19	黒 田 英 雄	〃
9. 6.16 ~ 9. 7. 8	藤 井 真 信	〃
9. 7.31 ~ 11. 3.13	津 島 寿 一	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	川 越 丈 雄	〃
5.11.26 ~ 7. 2.29	杉 山 元	陸軍次官
7. 3.19 ~ 7. 8. 8	小 磯 国 昭	〃

7. 9.21 ~ 9. 8. 1	柳 川 平 助	陸軍次官
9. 8.23 ~ 10. 9.21	橋 本 虎之助	〃
10.10.11 ~ 11. 3.23	古 莊 幹 郎	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	梅 津 美治郎	〃
5.11.26 ~ 7.12.28	石 井 英 橘	陸軍中將
7.12.28 ~ 11. 5.20	鈴 木 元 長	〃
11. 5.20 ~ 11. 6.30	栗 原 四 郎	陸軍少將
5.11.26 ~ 6.12. 1	小 林 躋 造	海軍次官
6.12.24 ~ 7. 6. 1	左近司 政 三	〃
7. 6.18 ~ 9. 5.10	藤 田 尙 德	〃
9. 5.24 ~ 11. 6.30	長谷川 清	〃
5.11.26 ~ 5.12.10	米 村 末 喜	海軍中將
5.12.10 ~ 7.12.24	植 村 茂 夫	〃
7.12.24 ~ 10.12. 4	小 野 彌 一	〃
10.12. 4 ~ 11. 6.30	大田垣 富三郎	海軍少將
5.11.26 ~ 6.12.21	小 原 直	司法次官
7. 2.10 ~ 9. 7.14	皆 川 治 広	〃
9. 7.31 ~ 10. 5.13	金 山 季 逸	〃
10. 5.22 ~ 11. 6.30	長 島 毅	〃
5.11.26 ~ 6. 4.15	野 村 嘉 六	文部政務次官
6. 4.28 ~ 6.12.15	横 山 金太郎	〃
7. 2.10 ~ 7. 5.27	安 藤 正 純	〃
7. 6.18 ~ 9. 7.19	東 郷 実	〃
9. 7.31 ~ 11. 3.21	添 田 敬一郎	〃
11. 4.30 ~ 12. 6.30	山 本 厚 三	〃
5.11.26 ~ 6.12.17	中 川 健 蔵	文部次官
7. 2.10 ~ 9. 8.11	栗 屋 謙	〃
9. 8.31 ~ 11. 6. 9	三 辺 長 治	〃
11. 6.11 ~ 11. 6.30	河 原 春 作	〃



5.11.26 ~ 6. 4.15	大 麻 唯 男	文部参与官
6. 4.28 ~ 6.12.15	工 藤 鉄 男	〃
7. 2.10 ~ 7. 5.27	山 下 谷 次	〃
7. 6.18 ~ 9. 7.19	石 坂 豊 一	〃
9. 7.31 ~ 11. 3.25	山 榊 儀 重	〃
11. 4.30 ~ 11. 6.30	作 田 高太郎	〃
5.11.26 ~ 6.12.17	篠 原 英太郎	文部省普通学務 局長
7. 2.10 ~ 9. 6. 8	武 部 欽 一	〃
9. 6.23 ~ 10. 4. 2	下 村 寿 一	〃
10. 4.19 ~ 11. 6. 9	河 原 春 作	〃
11. 6.11 ~ 11. 6.30	菊 池 豊三郎	〃
5.11.26 ~ 11. 6.30	芝 田 徹 心	文部省図書館長
5.11.26 ~ 8. 3.31	藤 岡 勝 二	東京帝国大学教 授
5.11.26 ~ 7. 8. 4	長 屋 順 耳	東京外国語学校長
7. 9.21 ~ 11. 6.30	戸 沢 正 保	〃
5.11.26 ~ 11. 6.30	岡 田 武 松	気象台技師
5.11.26 ~ 6.12.14	松 村 真一郎	農林次官
7. 2.10 ~ 9. 7.10	石 黒 忠 篤	〃
9. 7.31 ~ 11. 6.30	長 瀬 貞 一	〃
5.11.26 ~ 6.12.21	田 島 勝太郎	商工次官
7. 2.10 ~ 11. 6.30	吉 野 信 次	〃
5.11.26 ~ 6. 6.19	今井田 清 徳	逓信次官
6. 6.27 ~ 11. 1.11	大 橋 八 郎	〃
11. 1.16 ~ 11. 6.30	富 安 謙 次	〃
5.11.26 ~ 6. 9.12	青 木 周 三	鉄道次官
6.10. 5 ~ 9. 8. 4	久保田 敬 一	〃
9. 8.23 ~ 11. 6.30	喜 安 健次郎	〃
5.11.26 ~ 6. 6.12	久保田 敬 一	鉄道省運輸局長
6.10. 5 ~ 7. 1.20	中 山 隆 吉	〃

7. 2.10 ~ 9. 6. 1		日 淺	寬	鐵道省運輸局長
9. 6.16 ~ 9. 8. 4		前 田	穰	〃
9. 8.23 ~ 11. 6.30		新 井	堯 爾	〃
5.11.26 ~ 5.12.29	侯爵	小 村	欣 一	拓務次官
6. 1.12 ~ 7. 5.26		堀 切	善次郎	〃
7. 6.18 ~ 9. 7. 8		河 田	烈	〃
9. 7.31 ~ 10. 1. 9		坪 上	貞 二	〃
10. 1.12 ~ 11. 6.30		入 江	海 平	〃
5.11.26 ~ 11. 6.30		桜 井	錠 二	從二位勳一等
5.11.28 ~ 9. 2. 6		鎌 田	栄 吉	從三位勳一等
5.11.26 ~ 11. 6.30	男爵	阪 谷	芳 郎	正三位勳一等
〃		田中館	愛 橘	〃
〃		嘉 納	治五郎	〃
〃		上 田	万 年	〃
5.11.26 ~ 7. 9.22		田 丸	卓 郎	從三位勳二等
5.11.26 ~ 11. 6.30	伯爵	林 博	太 郎	正三位勳一等
〃		中 目	寛	從三位勳二等
〃		福 永	恭 助	正六位勳四等功 五級
7.11.21 ~ 11. 6.30		佐 伯	功 介	從五位 京都帝國大學教 授
9. 2. 3 ~ 11. 6.30		新 村	出	〃
〃		岡 倉	由三郎	正四位勳三等
9. 6.30 ~ 11. 6.30		門 野	幾之進	勳四等

臨時委員

6. 4.10 ~ 11. 6.30	伯爵	二 荒	芳 德	從三位勳三等
〃		神 保	格	正四位勳三等
6. 4.10 ~ 11. 6.23		末 弘	巖太郎	從四位勳三等
6. 4.10 ~ 11. 6.30		桜 根	孝之進	從四位勳四等
〃		宮 崎	静 二	正七位
〃		菊 沢	季 生	〃

11. 6.11 ~ 11. 6.30	松 村 真一郎	正三位勳二等
11. 6.23 ~ 11. 6.30	世 良 琢 磨	従五位
幹 事 長		
5.11.26 ~ 11. 6.30	芝 田 徹 心	文部省図書局長
幹 事		
5.11.26 ~ 11. 6.30	森 山 銳 一	法制局参事官
5.11.26 ~ 9. 6. 8	菊 沢 季 麿	文部書記官
5.11.26 ~ 7.10.15	山 崎 犀 二	文部省図書事務官
7.10.31 ~ 11. 6.30	谷 原 義 一	文部書記官
5.11.26 ~ 11. 6.30	保 科 孝 一	東京文理科大学教授
書 記		
5.11.26 ~ 11. 6.30	阿 部 隆 介	文部属
//	堀 泰	//
//	水 平 勳	//
//	湯 沢 幸吉郎	

第1次主査委員会

委 員 長 栗屋 謙  
 委 員 芝田 徹心  
 宮崎 静二  
 幹 事 岡倉由三郎  
 書 記 水平 勳

佐伯 功介 神保 格  
 菊沢 季生 新村 出  
 谷原 義一 保科 孝一

第2次主査委員会

委 員 長 三辺 長治  
 委 員 芝田 徹心  
 佐伯 功介  
 菊沢 季生  
 幹 事 谷原 義一  
 書 記 水平 勳

新村 出 岡倉由三郎  
 神保 格 宮崎 静二  
 保科 孝一

第3次主査委員会

委員長  
委員

林 博太郎

大橋 八郎

新村 出

中目 覺

幹事長  
幹事  
書記

芝田 徹心

森山 銳一

水平 勳

添田敬一郎

戸沢 正保

岡倉由三郎

谷原 義一

三辺 長治

吉野 信次

保科 孝一

## 2 ローマ字調査会

(昭 23.10.12 ~ 昭 24.5.31)

○規程 (昭 23.10.12 大臣裁定)

### ローマ字調査会規程 (原文は縦書)

第1条 ローマ字調査会は、文部大臣の所轄とし、ローマ字による国語の書き表わし方に関する事項を調査審議する。

調査会は、前項の調査審議の結果を文部大臣に報告し、及び文部大臣の諮問した事項について答申するものとする。

第2条 調査会は、委員 40 人以内で組織する。

特別の事項を調査審議するため、必要があるときは、臨時委員を置くことができる。

第3条 委員は、政治、学術、教育、文化、実業、勤労等の各界における学識経験のある者の中から、文部大臣が命じ、又は委嘱する。

臨時委員は、学識経験のある者の中から調査会の承認を得て、文部大臣が命じ又は委嘱する。

第4条 臨時委員は、特別の事項の調査審議が終ったときは、退任するものとする。

第5条 調査会に、委員の互選による委員長及び副委員長各 1 人を置く。委員長及び副委員長の任期は、1 年とする。

第6条 調査会に専門の事項を調査させるために専門調査員を置くことができる。

専門調査員は学識、経験のある者の中から調査会の承認を得て、文部大臣が命じ又は委嘱する。

第7条 委員長は、会務を総理する。

副委員長は、委員長を補佐し、委員長が欠けたとき、又は委員長に事故があるときは、その職務を代理する。

第8条 調査会は、文部大臣に対し、文部大臣又は文部部内職員が調査会に出席して説明することを求めることができる。

文部大臣及び文部部内職員は、調査会に出席して意見を述べる  
ことができる。

第9条 調査会の会議は原則として、公開する。

第10条 調査会には必要がある場合には、一般の意見を聞くために、  
公聴会を開く。

第11条 調査会に幹事を置く。

幹事は、関係各官庁の官吏の中から、文部大臣が命じ又は委嘱  
する。

幹事は、委員長の指揮を受けて庶務を整理する。

第12条 調査会に書記を置く。

書記は関係各官庁の官吏の中から、文部大臣が命じ又は委嘱す  
る。

書記は、委員長及び幹事の指揮を受けて、庶務に従事する。

## ○議事規則

### ローマ字調査会議事規則（原文は縦書）

第1条 会議は、委員長が招集する。

第2条 委員長は、会議の議長となり、議事を整理する。

第3条 委員長は、調査会にはかり質疑、討論その他の発言につい  
て時間を制限することができる。

第4条 会議は、委員長委員及び臨時委員を合わせて、その半数以  
上が出席しなければ開くことができない。但し、あらかじめ特に  
議決を経たときはこの限りでない。

第5条 議席は、「あいうえお」順とする。

第6条 発言しようとするものは、議長の許可を受けなければな

らない。

第7条 議事は、出席の委員及び臨時委員の過半数で決定する。

可否同数のときは、議長が決定する。

第8条 採決は、挙手又は、起立によって決定する。但し、議決によって記名投票又は無記名投票によることができる。

第9条 調査会に、必要があるときは、主査委員会を設けることができる。

主査委員会は、委員及び臨時委員の中から、委員長が会議にはかって指名する。

第10条 主査委員は、互選によって主査委員長を設ける。

主査委員長は、審査の経過及び結果を会議に報告しなければならない。

主査委員会の議事についてはこの規則を準用する。

第11条 専門調査員は、総会、又は、主査委員会に出席して、その担当の事項について意見を述べることができる。

第12条 この規則に定めてない事項については、会議にはかって委員長が定める。

## ○会議の開会

### ・総会

第1回（昭和23.11.9）～第2回（昭和23.11.17）

### ・主査委員会

#### ・つづり方に関する主査委員会

第1回（昭和23.12.1）～第7回（昭和24.5.6）

#### ・ローマ字教育に関する主査委員会

第1回（昭和23.12.3）～第10回（昭和24.5.27）

# ローマ字調査会委員名簿

(昭和 23.12.2 現在)

委員長	山崎匡輔	東京都教育委員
副委員長	宮沢俊義	東京大学教授
委員	秋岡悟郎	日本図書館協会理事
	安藤正次	学術研究会議国語国字問題研究班 班長
	池田義信	日本映画連合会事務局長
	石黒修治	国語協会理事
	井手成三	文部次官
	井上達二	井上眼科病院長
	宇田道夫	日本放送協会編成局演出部長
	大塚明郎	元京城帝国大学理学部長
	香月善次	日本交通公社教習所長
	亀井孝	東京商科大学予科教授
	河合一雄	日本タイムズ社主筆兼編集総長
	金田一京助	日本学士院会員
	桑原信	国際文化振興会翻訳課長
	紺野四郎	時事新報社副主筆
	式田次雄	東京都立第五女子高等学校教官
	田口泖三郎	科学研究所所員
	千葉勉	元東京外国語学校教授
	千葉雄次郎	中京新聞社社長兼主筆
	友井楨	日本キリスト教団総主事教師部長
	長沼直兄	言語文化研究所理事長
	萩原忠三	共同通信社編修総務
	服部四郎	東京大学助教授
	花島克巳	日本出版協会海外課長



幹 事	平 井 昌 夫	成城高等学校講師
	古 垣 鉄 郎	日本放送協会専務理事
	前 田 静 夫	渋谷区立広尾小学校教官
	松 坂 忠 則	カナモジカイ常務理事
	村 岡 花 子	文部省社会教育局調査員
	物 部 長 興	日本民主主義文化連盟教育部長
	吉 阪 俊 蔵	東京商工会議所専務理事
	吉 田 甲子太郎	新潮社「銀河」編修長
	吉 野 源三郎	岩波書店「世界」編修長
	北 岡 健 二	文部省学校教育局中等教育課長
	坂 元 彦太郎	// // 初等教育課長
	青 木 誠四郎	// 教科書局教材研究課長
	釘 本 久 春	// // 国語課長
	細 井 房 夫	文部事務官
	松 尾 拾	//
書 記	高 木 博	文部事務官
	天 沼 寧	//
	福 田 安 男	//

ローマ字調査会 つづり方に関する主査委員会委員名簿

(昭和 23.12.2 現在)

主査委員長	安藤 正次		
副主査委員長	服部 四郎		
主査委員	宇田 道夫	大塚 明郎	桑原 信
	田口 泖三郎	千葉 勉	長沼 直兄
	平井 昌夫	吉阪 俊蔵	

ローマ字調査会 ローマ字教育に関する主査委員会委員名簿

(昭和 23.12.2 現在)

主査委員長 長沼 直兄  
副主査委員長 前田 静夫  
主査委員 安藤 正次 石黒 修治 井上 達二  
式田 次雄 村岡 花子 宮沢 俊義  
吉田甲子太郎

## ローマ字調査会の発足まで（経過説明）

文部省教科書局国語課  
ローマ字調査係  
（昭和23年10月）

### I ローマ字教育協議会

昭和22年4月から、全国の小学校ならびに新制中学校で、ローマ字教育が実施されることになったが、これにさきだって、ローマ字教育を実施するについてのいろいろの対策を協議するために、昭和21年6月、文部省に「ローマ字教育協議会」が設置されて、教育関係者、学者、ローマ字研究家、放送、出版関係者などにお集りを願ひ、同年10月まで慎重に審議を重ねた結果、「ローマ字教育の指針」「ローマ字教育を行ふについての意見」をとりまとめ文部大臣に提出した。（昭和21年10月22日）。当局はこれに基いてその実施方法を慎重に検討した結果「国民学校におけるローマ字教育実施要項」

（注「備考（1）この要項における国民学校とは、来年度から新学制が実施される場合には、小学校および新制中学校をさすのである。」）を決定、発表し（昭和22年1月20日）、これによって、昭和22年度からローマ字教育が実施されているのである。

ローマ字教育協議会の「ローマ字教育を行ふについての意見」のうち、「ローマ字の表記法（特につづり方）」については、別冊『ローマ字教育の指針』に示す方式をとるが、更に適當の機関を設け、学術上・教育上および實際生活上から研究を進め、改善をはかられ

たきこと」とあり、また、1946年（昭和21年）にわが国を訪れたアメリカの教育使節団の報告書の「国語の改革」の章に、「1 ある形のローマ字をぜひとも、一般に採用すること。2 選ぶべき特殊の形のローマ字は、日本の学者・教育権威者および政治家より成る委員会が、これを決定すること、（以下省略）とあるのに基いて、当局は公正な機関を設けて、ローマ字に関する諸種の問題について調査・審議をすることとなったが、これには相当の日時を要するので、昭和22年度におけるローマ字教育については、文部当局談に「従って、この要項はさしあたり昭和22年度に実施すべき点について定めたものであり、その実施の成果を基礎として更に昭和23年度からの計画を考えていきたいと思ひます。」とあるとおり、ひとまず暫定的の処置によって実施することとなったのである。

## II ローマ字調査委員会準備会

以上のようにローマ字による国語の書きあらわし方、また、小・中学校におけるローマ字教育については、まだまだ検討を加え、改善をしなければならない点がたくさんにある。たとえば、つづり方の問題にしても、ローマ字教育の方針や方法にしても、まだ研究を要する点が少なくないのであって、当局はこれらの問題についてすみやかに根本的解決をはかり、本格的なローマ字教育を一日も早く実施することが、刻下の急務であると考え、昨年4月以降「ローマ字調査委員会」（仮称）の設置を準備しつつあった。

この委員会は社会各方面の権威者をもうらした民主的な構成であるようにし、あくまでも中正な性格をもち、公正妥当な結論を得るために、現在わが国を代表する各職域・各団体の権威者・代表者等の協力のもとに、委員選出の方法・範囲、また、委員会運営の方法などについての隔意のない意見をきき、それにしたがって委員会を設置するために、委員会の発足にさきだって、ローマ字調査委員会準備会を開くこととした。

準備会は、ローマ字研究家、言語関係、報道関係者、官界等の権

威者・代表者にお集りを願い、昨年の暮から今年の初めにかけて下記の通り4回開いた。

第1回 昭和22年12月5日（金）

第2回 昭和22年12月11日（木）（第1回小委員会）

第3回 昭和23年1月22日（木）（第2回小委員会）

第4回 昭和23年1月29日（木）

このうち、第1回および第4回は総会であり、第2回および第3回は小委員会である。

準備会の経過概要は次のとおりである。すなわち、第1回の準備会において、当局からローマ字教育の実施にいたるまでのいきさつ、委員会設置の必要、準備会開催の必要と目的ならびに使命などについて説明をして後、座長を定め、種々質疑応答を重ねた結果、委員の選出は、現在わが国の文化を代表するような団体をできるだけたくさん選んで、それを委員の推薦母体とすることを決定し、推薦の具体的方法ならびに人員配当などのこまかい点は小委員会を設けて検討することを決定し、小委員会を構成する小委員の人選は座長一任となった。

準備小委員会 昭和22年12月11日、第1回小委員会において、推薦母体、推薦の具体的方法、人員配当などを決定し、それにしたがって当局は政治、学術、教育、文化、実業、勤労等の各職域団体の代表者に対して、「識者の御意見・御研究などを十分に考慮検討して、ローマ字による国語の書きあらわし方ならびにローマ字教育に関する調査・研究につき遺憾なきを期したい」から「貴団体におかれて、こうした問題について、もっとも適当と思われる方々を当局の参考までに」知らせられたい旨の依頼状をおくり、これに対する各方面からの回答に基づいて、第2回小委員会において慎重に選考した結果、委員の候補者につきいちおうの成案を得ることができた。なお、臨時委員の選考、委員会の運営などのことについては、委員会が本格的に発足してのち、委員会自身が決定すべきことな

どを議決した。ついで本年1月29日第4回準備会を開き、小委員会で得た結論を報告し、慎重な検討、質疑応答を重ねて委員候補者についての最後案をまとめた。また官制については各方面との折衝の関係上、多少の字句の修正はあるかも知れないが、趣旨は変更しないという了解のもとに、当局に一任し、議事規則は委員会自身がつくることなどを定め、最後に下記の決議を行って準備会はその使命を遺憾なく果して解散した。

ローマ字調査委員会準備会決議：本準備会はローマ字問題の重要性にかんがみ、本問題に関する公正にして権威ある委員会を構成するための案を得ることに努めてきたが、ここに結論を得た。ついでには本準備会の意見を基礎としてローマ字調査委員会がすみやかに設置され、中正妥当な結論が得られるように希望する。

### Ⅲ ローマ字調査会

準備会終了後当局としては、その決議に基いて、一日もすみやかに、「ローマ字調査委員会」(仮称)を本格的に発足させるために、必要な準備をととのえつつあったのであるが、政令による委員会を設置するための根拠となる「各省設置法」の制定・施行をみないために、いたずらに日を送ることになったのである。しかしながらローマ字に関する調査・審議は一日もゆるがせにすることができないたいせつなことがらであるので、この際ひとまず政令によらずに大臣裁定による調査会を設置することとし、将来、根拠法規の制定されたあかつきには、政令によるものにきりかえる予定をもって「ローマ字調査会」という名称のもとに出発することとなったのである。

### 3 ローマ字調査審議会

(昭和 24.6.1 ~ 昭 25.4.16)

○政令 (昭和 24.7.5)

政令第 256 号

(原文は縦書)

#### ローマ字調査審議会令

内閣は、文部省設置法 (昭和 24 年法律第 146 号) 附則第 17 項の規定に基づき、この政令を制定する。

(所掌事務)

第 1 条 ローマ字調査審議会 (以下「審議会」という。)は、左に掲げる事項を調査審議し、及びこれらに関し必要と認める事項を、文部大臣及び関係各大臣に建議する。

- 1 ローマ字による国語の表記法に関する事項
- 2 ローマ字による国語教育に関する事項

(組織)

第 2 条 審議会は、委員 40 人以内で組織する。

- 2 特別の事項を調査審議するため必要があるときは、審議会に臨時委員を置くことができる。
- 3 専門の事項を調査するため必要があるときは、審議会に専門調査員を置くことができる。

第 3 条 委員及び臨時委員は、政治、教育、学術、文化、報道、経済等の各界における学識経験のある者及び関係各庁の職員のうちから、文部大臣が任命する。

- 2 専門調査員は、学識経験のある者の中から、審議会の意見を聞いて、文部大臣が任命する。

第 4 条 臨時委員は、特別の事項の調査審議が終ったときは、退任するものとする。

- 2 委員、臨時委員及び専門調査員は、非常勤とする。

第5条 委員により会長として互選された者は、審議会の会務を総理する。

2 委員により副会長として互選された者は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。

3 会長及び副会長は、1年ごとに改選する。

(部会)

第6条 審議会は、その定めるところにより、部会を置くことができる。

2 部会に属すべき委員及び臨時委員は、会長が指名する。

3 各部会に属する委員により部会長として互選された者は、各部会の会務を掌理する。

(議事)

第7条 審議会は、委員及び議事に関係のある臨時委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 審議会の議事は、出席した委員及び議事に関係のある臨時委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

3 審議会の会議は、原則として公開とする。

4 審議会は、必要があると認めるときは、関係者に対し、第1条に掲げる事項に関し、意見の開陳又は説明を依頼することができる。

5 第1項及び第2項の規定は、部会の議事に準用する。

(庶務)

第8条 審議会の庶務は、文部省調査普及局において処理する。

(雑則)

第9条 この政令に定めるもののほか、審議会の議事の手続その他運営に関し必要な事項は、審議会が定める。

附 則

1 この政令は、公布の日から施行し、昭和24年6月1日から適

用する。

- 2 この政令施行の後最初に任命される委員以外の委員及び臨時委員は、当分の間、第3条第1項の規定にかかわらず、同項に掲げる者につき、文部大臣が定める方法で推薦された者のうちから、文部大臣が任命するものとする。

○告示（昭和24.11.30）

文部省告示第193号

（原文は縦書）

ローマ字調査審議会令（昭和24年政令第256号）附則第2項の規定による委員及び臨時委員候補者の推薦の方法を次のように定める。

昭和24年11月30日

文部大臣 高瀬 荘太郎

### ローマ字調査審議会委員及び臨時委員 候補者推薦方法

第1条 文部大臣は、ローマ字調査審議会令附則第2項に規定する委員及び臨時委員を推薦させるため、必要あるごとに、ローマ字調査審議会の委員の互選による者10人以内で協議会を組織せしめる。

第2条 協議会は、ローマ字調査審議会令第3条第1項に掲げる者のうちから候補者を選定し、推薦するものとする。但し、学識経験のある者の候補者については、政治・教育・学術・文化・報道・経済等の各界について選出分野を定め、その代表団体の意見を聞くものとする。



## 附 則

この規程は、公布の日から施行し、昭和24年11月1日から適用する。

### ○会議の開会

#### ・総 会

第1回（昭和24.12.20）～第2回（昭和25.3.29）

#### ・部 会

##### ◦ つづり方部会

第1回（昭和24.6.18）～第12回（昭和25.3.3）

##### ◦ 教育部会

第1回（昭和24.6.2）～第16回（昭和25.2.10）

##### ◦ 分ち書き部会

設置されたが、時間の関係上部会は1回も開かれなかった。

補注：ローマ字調査審議会は昭和24.6.1に発足したが、その委員および審議事項はすべて、ローマ字調査会（昭和23.10.12発足）から引きついだものであって、実際上は部会の回数は第1回から新たに発足せず、ローマ字調査会のつづり方に関する主査委員会（第7回まで）、および、ローマ字教育に関する主査委員会（第16回まで）をうけて、それぞれ、第8回～第19回、および第11回～第26回と呼称された。

### ローマ字調査審議会委員名簿

（昭和24.12.20現在）

会 長	安 藤 正 次	東洋大学教授
副会長	長 沼 直 兄	言語文化研究所理事長

委員	秋	岡	梧	郎	都立深川図書館長	
	池	田	義	信	日本映画連合会事務局長	
	石	黒	修	治	国立教育研究所所員	
	伊	藤	日出	登	文部事務次官	
	井	上	達	二	井上眼科病院長	
	宇	田	道	夫	日本放送協会編成局演出部長	
	大	塚	明	郎	成城学園嘱託	
	香	月	善	次	日本交通交社観光学園理事	
	亀	井		孝	一橋大学助教授	
	金	田	一	京	助	国学院大学教授
	桑	原			信	国立国会図書館主事
	紺	野	四	郎		時事新報社副主筆
	式	田	次	雄		都立第五女子高等学校教諭
	田	口	泖	三郎		科学研究所所員
	千	葉		勉		上智大学教授
	千	葉	雄	次郎		中京新聞社社長
	友	井		楨		日本基督教団総務部長
	萩	原	忠	三		共同通信社主幹
	服	部	四	郎		東京大学教授
	花	島	克	巳		日本出版協会事務局海外係主任
古	垣	鉄	郎		日本放送協会会長	
前	田	静	夫		渋谷区立広尾小学校教諭	
松	坂	忠	則		カナモジカイ理事長	
宮	沢	俊	義		東京大学教授	
村	岡	花	子		行政監察委員会委員	
吉	田	甲	子太郎		明治大学教授	